

# 日本における聖教の伝来と保存 — 東大寺を例に —

横内裕人 (日本文化庁)

## 국문요약

### 일본에서의 聖教의 전래와 보존 -東大寺를 예로-

일본의 사원에서는 승려의 종교 활동이나 수학에 수반하여, 수많은 經卷과 聖教가 서사 및 저술되어 東大寺·興福寺·延暦寺·高野山 등의 대사원은 물론이고, 지방의 중소사원에도 소중히 보관되어 오늘날에 이르고 있다.

東大寺의 경우는 尊勝院, 東南院, 戒壇院 등 院家에 예부터 소장되어 왔던 佛書로 구성되어 있으며, 근대에 들어 정리를 거쳐서 東大寺 도서관에 架藏되어 있다. 東大寺는 鎌倉時代와 戰國時代에 두 번의 戰火를 겪

있으며, 院家の 經藏에 八宗에 이르는 聖敎를 축적해 근대를 맞이했다.

東大寺 聖敎는 明治期에 황실에 헌상된 尊勝院 聖敎(聖語藏經卷) 외에 약간의 古經卷과 宗性凝然 찬술의 聖敎 등 원가에 전래되었던 다수의 聖敎가 東大寺에 남겨져 현재 약 1만점에 이른다. 그 중에는 국가지정문화재로 단독으로 지정된 것이 다수 있고, 또한 平成 23년에 「東大寺聖敎」로서 1806점이 일괄적으로 중요문화재로 지정되었다. 그 내역은 사본 872점, 판본 934점을 헤아린다.

南北朝時代의 東南院 經藏에는 宋나라와 고려로부터 유입된 불서 총 97부, 권수로 96권 225점이 보관되어 있는 것으로 판명되었는데, 중세에 이르러서도 東大寺가 새로운 대륙불교를 계속하여 수용해 왔음을 알 수 있다. 그 가운데에는 고려의천판도 포함되어 있었던 것 같다. 또한, 尊勝院 經藏에도 唐經과 奈良時代에 서사된 五月一日經을 비롯해 의천판(隨疏演義鈔)이 전해지고 있어, 東大寺 經藏이 奈良時代 이래의 텍스트와 대륙의 새로운 불교를 전승해 왔음이 확인된다.

화엄, 삼론을 중심으로 폭넓게 八宗에 걸친 諸宗의 불서로 구성된 東大寺 聖敎는 고대로부터 근세에 이르는 東大寺의 학문을 지탱해 온 중핵이 되는 經卷이며, 南都寺院의 聖敎를 대표하는 것으로서 가치가 높다.

東大寺 聖敎에 대한 상세한 조사는 이미 지정된 것들에 이어 104부, 114부 등에 이르고 있어, 앞으로는 논의서, 차제서 등 東大寺 敎學의 구체적 양상을 접할 수 있는 내용들이 차츰 밝혀질 것으로 기대된다.

일본에 전래된 聖敎는 奈良時代 이래로 사원의 종교 활동을 바탕으로 하여 생성되고 재생산되었으며, 또한 많은 사람들의 각고의 노력에 의해 보관되고 보전되어 오늘날에 이르렀다. 이는 세계적으로도 유례를 찾아볼 수 없는 질과 수량을 자랑한다. 이러한 聖敎는 불교학, 불교사, 국어학, 국문학, 역사학 등 많은 학문에서 이용되는 지식과 경험의 보고이다. 우리들은

이러한 문화재를 이용하는 한편, 적절히 보존하고 수리하여 후세에 전해야 할 의무가 있다. 일본에 있어서의 노력들이 한국 문화재 보존에 참고가 되었으면 한다.

주제어 : 성교(聖敎), 경장(經藏), 동대사(東大寺), 동남원(東南院), 존승원(尊勝院), 성어장(聖語藏), 나라조사경(奈良朝寫經), 송(宋), 고려(高麗), 의천판(義天版)

## はじめに

日本は奈良時代以来、数多くの寺院が建立された。寺院では僧侶の宗教活動や修学に伴い、数多くの経巻・聖教が書写・著述され、僧侶の個人の房や寺院・院家の経蔵に蓄積され、師資の間で大切に相承され、現代に至っている。

東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺・醍醐寺・高野山・東寺・仁和寺・石山寺・高山寺など奈良・平安・鎌倉時代に創設された大寺院は勿論、知恩院・本願寺・専修寺など、あるいは禅宗系の永平寺・総持寺・建仁寺などの鎌倉仏教の寺院はもちろん、地方の中小寺院においても平安・鎌倉時代以降の聖教を伝えているところも多い。

しかしながら文化財指定を受け、全容が判明しているものはごく僅かであり、その数量たるや、現在においても不明な寺院が殆どと言って良い。

本論文では、我が国における寺院聖教の生成と伝来過程について理解を深めるべく、奈良に所在する東大寺の聖教群を取り上げ、その概要を紹介すると共に、これらを伝えていくための保存処置、特に修理について簡単に触れてみたい。

## I. 東大寺聖教の概要

### 1. 東大寺聖教の伝来と構成

東大寺に伝来する聖教は、尊勝院、東南院、戒壇院、真言院、四聖坊、北林院などの院家旧蔵になる仏書から構成され、近代における整理を経て、東大寺図書館に架蔵されている<sup>1)</sup>。

東大寺には、創建当初の経蔵や大仏殿内の六宗厨子に根本となる経巻が収蔵され、また平安時代以降建立された東南院・尊勝院をはじめとする諸院家の経蔵に修学のため著述された聖教が収蔵されていた。治承四年の罹災によりその大部分が焼亡したが、焼失を免れた隋・唐経・五月一日経など正倉院綱封蔵の経巻が取り出されて尊勝院経蔵に移管され、教学の復興に利用された。鎌倉時代以降、東大寺の学僧は華嚴・三論を中核としながらも、法相(唯識)、律、因明、俱舎、天台、真言の八宗に亘る諸宗の修学に勤しみ、院家経蔵に聖教を蓄積し近代を迎えた。

最大の蔵書を有する尊勝院経蔵(聖語蔵)は、明治二十七年に隋・唐経・五月一日経ほか天平写経・平安から室町の古写経、宋版等の古版経など四九六〇巻とともに皇室に献上され、東大寺には若干の古経巻と宗性・凝然撰述聖教など院家伝来の多数の聖教が東大寺に残された<sup>2)</sup>。現在、東大寺に現存する聖教は、尊勝院旧蔵のものを中核に諸院家伝来のものを合わせ約一万点に及ぶ。

明治三十年代に諸院家に伝来した聖教を形状・内容を基準に編成し、一〇一部写経(卷子本)、一〇二部版経(卷子本)、一一一部写経(冊子本)、一一二部版経(冊子本)、以下、宗性・凝然撰述聖教が一〇三部

1) 拙稿「東大寺図書館と収蔵史料」『古文書研究』五九号、二〇〇四年。

2) 拙稿「尊勝院聖語蔵経巻の宮内省献納について」『南都仏教』八六号、二〇〇五年。

(卷子本)・一一三部(冊子本)に、室町時代以降の論義書などが一一四部以降に宗派別に分類されている。平成二十三年に東大寺聖教の一部が重要文化財に指定された。対象となる聖教は、写本は八七二点、版本は九三四点を数える。

こうした分類を経ているため、もともと東大寺聖教を構成していた院家の聖教の内実が明らかでない場合が多い。ただ、寺内外に諸院家の経蔵目録が残されており、こうした記録から特色のある院家の聖教の内容を知ることができる。

その例をいくつか挙げてみよう。

### 1) 東南院経蔵

愛知県大須観音(真福寺)には貞治六年成立の「東南院経蔵目録」が所蔵されている<sup>3)</sup>。この目録には、総計一〇五三部の経論章疏が書き上げられている。三論宗の本所たる東南院にふさわしい三論宗の要書と、南都の論義に必要な法相関係、因明関係の書からなり、「唐」との名称から類推される中国渡来の諸本がこれに加わっている。この目録は、平安時代以降、鎌倉時代までの間に、東大寺東南院が東アジアで興起した新しい仏教を受け止めてきた動かない証拠となっている。

「竹櫃の唐」書は、総計九七部、員数は九六巻・二二五帖にのぼる。中国を連想させる竹製の櫃は第一から七まであり、具本的には、次のようになる。

唐・北宋・南宋・遼・新羅の僧侶の章疏・伝記・語録など

3) 『真福寺古目録集二』(阿部泰郎・山崎誠編『真福寺善本叢刊』第二期第一巻、臨川書店、二〇〇五年)所収、拙稿「東アジアのなかの南都仏教」(『文学』隔月刊第一一巻第一号、岩波書店、二〇一〇年)。

唐：後魏惠光『花嚴義記』四卷、『觀音義疏』二帖(智者説、灌頂記)、  
『清觀音經疏』一帖(智者説、頂法師記)、唐宗密『円覺經大疏抄』十三  
卷、同『孟蘭梵疏』一帖、道宣『靈感伝』二帖、同『浄心誠觀』一帖、湛  
然『法花不二門』一帖、同『始終心要』一帖、新羅元曉『無量壽經宗要』  
一帖、同『(因明)入証理論疏』一帖

北宋天台關係典籍：知礼『十不二門指要鈔』二帖、『觀音玄義記』二  
帖、『觀音玄義科』一帖、『觀音義疏記』二帖、『觀音義疏記科』一帖、遵  
式『往生浄土決題行願二門』一帖、智円『觀音經疏闡義抄』二帖、『般若  
心經疏』一帖、『般若心經疏科』一帖、『般若心經疏詒謀鈔』一帖、『阿弥  
陀經疏』一帖、『阿弥陀經疏科』一帖

北宋律・浄土：元照『孟蘭梵經疏新記』一帖、『孟蘭梵經疏科』一帖、  
『仏制比丘六物図』一帖、『六物図科』一帖、円義大師師道遵式(慈雲  
遵式とは別人)『金剛般若經助深記』三帖

北宋伝記：贊寧『大宋高僧伝』三十卷(第廿二欠)、戒珠『浄土往生  
伝』三帖

禪籍：永明延寿『万善同帰集』三帖、『智覚禪師注心誠』四帖(第二  
欠)、神清『北山録』十卷(恵宝注)、道原『景德伝灯録』十五帖、『続灯  
録』十一帖、『南山浮惣(ママ)寺本和尚語録』上帖、『瑞光語録□(円)  
照語録』一帖、『仏照禪師語録』一帖、『妙智禪師語録』一帖、惟首『大  
蔵經綱目指要録』八帖、常坦『祖門心印集』二帖、海照『仏祖同風集』  
三帖、『大修山大円禪師警策』一帖、『無住禪師法要』一帖など

遼僧撰述仏書：覺苑『演密抄』十卷、志実『梵網通理抄』四卷、思孝  
『菩提心戒儀』三卷、義天『円宗文類』二十二帖

南都の一院家にこれほど多くの北宋以降の中国・朝鮮半島からの輸  
入仏書が所蔵されていることは意外に思われる。

その中身は唐・北宋・南宋・遼・新羅・高麗の僧侶の手になる章疏や伝記・語録である。元暁の著作が見られるほか、北宋天台関係典籍としては知礼・遵式・智円の著書、律・浄土教として元照著作『孟蘭梵経疏新記』『孟蘭梵経疏科』『仏制比丘六物図』『六物図科』もあり、北宋の円義大師師道遵式（慈雲遵式とは別人）の著作もある。加えて賛寧『大宋高僧伝』や著名な戒珠『浄土往生伝』が見える。

最も充実しているのが禅籍である。永明延寿の著をはじめ、『北山録』などや、かの重源とも交流のあった育王山従廓（妙智禅師）の語録など多数所蔵されている。東南院が禅籍を排除していたのではなく、むしろ積極的に収集し、新動向に対応しようとしていると意味づけられる。

さらにまた、覚苑・志実・思孝ら遼僧撰述の仏書が含まれている。これらは義天版である可能性が高く、高麗義天『円宗文類』も収蔵されている。東南院経蔵に北宋・南宋、遼、高麗など東アジア諸国で書写・刊行された仏書原本が収蔵されていたことは、従来の南都仏教観に大きな変更を迫る事実といえる。東南院経蔵が、南都の伝統教学のみならず、浄土、律、禅といった宋代以降に発達した新傾向や遼・高麗で独自の発展を遂げた真言、律などの動向をカレントに受け止めていた証左でもある。

## 2) 尊勝院経蔵

尊勝院は華嚴宗の本所として教学の拠点となった有力院家で、多くの聖教類を蓄積している。現在、聖語蔵経巻として伝来する。その概要は、本レビューの飯田論文を参照されたい。なお東大寺図書館による聖語蔵経巻調査の成果が、『南都仏教』誌上に公表されていて有益である<sup>4)</sup>。

4) 東大寺図書館「正倉院聖語蔵経巻調査報告(一)」(『南都仏教』八六号、二〇〇五年)。

### 3) 北林院經藏

「北林院藏書目錄」(35 / 398) は、近世の北林院藏書を書き上げたものである。聖教類は千字文部号がつけられた八七部に分類され、仏書約七四〇部、外典約二〇〇部、歌書約二四〇部、総計一一八〇部四六〇〇余点に及ぶ。仏書に留まらず、外典・歌書を多く含む北林院藏書は、中・近世における寺院文化の多様性が反映したものととも思われ興味深い<sup>5)</sup>。現在では散在してしまった藏書の復元研究が待たれるところである。

なお東大寺図書館では、平成十六年度から、聖教の全巻撮影を進めており、順次、写真帳を公開している。東大寺聖教の内容が誰でも容易に知ることが出来るようになったことは、大変に有益である。写真帳の目録は、『南都仏教』誌上に掲載されている<sup>6)</sup>。

## 2. 特徴的な仏書

### 1) 東大寺聖教の構成

東大寺聖教を構成する仏書は、前述のように内容毎に分類されている。その概要は以下の通りである。

本坊経卷 (宝庫文書)

明治以来の経卷の分類過程で南都仏教図書館に移管されず、「印藏」す

- 5) 日下幸男「東大寺僧成慶と北林院旧藏書」『大阪市立高等学校教育研究会 国語部「研究集録・第一七号」(昭和六十一年)。
- 6) 「東大寺図書館藏貴重書写真帳目録(1)」(『南都仏教』八六号、二〇〇五年。101部・111部)、「東大寺図書館藏貴重書写真帳目録(2)」(『南都仏教』八七号、二〇〇六年。102部・112部)、「東大寺図書館藏貴重書写真帳目録(3)」(『南都仏教』八九号、二〇〇七年。113部)、「東大寺図書館藏貴重書写真帳目録(4)」(『南都仏教』九一号、二〇〇八年。114部)、「東大寺図書館藏貴重書写真帳目録(5)」(『南都仏教』九四号、二〇〇九年。121部)。



なわち現・東大寺本坊宝庫に留められていた経巻である。奈良時代に遡る経巻が多く、聖語蔵経巻と泣き別れになっているものがある。以下のものが重文指定されている。

毘婆沙論 卷第廿三 (天平十二年五月一日経) 一卷

瑜伽師地論 卷第十二、十三、十四、十七 (天平十二年五月一日経)

四卷

賢愚経 卷第十五 (奈良) 一卷

大威徳陀羅尼経 自卷第一至卷第十 (奈良) 十卷

大方等大集菩薩念仏三昧経 自卷第一至卷第十 (奈良) 十卷

大般涅槃経 自卷第一至卷第四十 (奈良) 四十卷

羯磨 (奈良) 二卷

華嚴経 卷第一、四、五、六、九、十一 (唐) 六卷

虚空蔵経 自卷第一至卷第八 (唐) 八卷

弥沙塞羯磨本 (唐) 一卷

細字金光明最勝王経 自卷第六至卷第十 (平安) 一卷

紺紙金字華嚴経 (鎌倉) 八十卷

東大寺図書館編 『(東大寺図書館新築記念) 東大寺蔵国宝重文善本聚英』 昭和四十三年に写真入りの解説 (堀池春峰氏執筆) がある。また、詳細な調査報告が、『南都仏教』誌上に公表されている<sup>7)</sup>。

一〇一部

当部には、奈良時代から室町時代にかけての古写経を架蔵している。

7) 東大寺図書館「東大寺収蔵経巻調査報告(一) 奈良時代(一)」(『南都仏教』八七号、二〇〇六年)、「東大寺収蔵経巻調査報告(二) 奈良時代(二)」(『南都仏教』八九号、二〇〇七年)、「東大寺収蔵経巻調査報告(三) 奈良時代(三)・唐時代」(『南都仏教』九一号、二〇〇八年)、「東大寺収蔵経巻調査報告(四)」(『南都仏教』九四号、二〇〇九年)。

指定品としては(重文=重、国宝=国)、

重・続華嚴經略經疏刊定記 卷第二他 五卷(奈良・平安時代)

重・法華統略 卷上 一卷(平安)

重・金剛般若經讚述 卷上 一卷(承和十一年書写)

重・百法頌幽抄 卷第一末 一卷(会昌三年書写・唐)

重・金光明最勝王經注釈 卷第五、第九 二卷(平安)

がある。古写經の優品は、聖語藏に多く残されているが、もと同類のものが含まれている。

#### 一〇二部

古經卷の内、版本を架蔵する。

重・大方広仏華嚴經随疏演義鈔 四〇卷(高麗・寿昌年他書写)

は、高麗義天が改版した義天版(高麗統蔵經)と呼ばれる版本で、義天版完本としては現存唯一の貴重な經疏である(後述)。書誌データは、東大寺図書館編『義天版 華嚴經随疏演義鈔目録』(私家版)、及び奈良県教育委員会『奈良県所在 中国古版經調査報告書』(平成十三年)に記載されている。その他、現存例の少ない院政期の版經や、春日版、聖守開板の東大寺版が含まれている。

#### 一〇三部

宗性・実弘・凝然撰述聖教の内、卷子装のもの。この内、宗性・凝然手写本が国指定文化に財指定されている。

重・東大寺宗性筆聖教并抄録本(二一四種)三四七冊・九九卷(冊子は一三部)

重・東大寺凝然撰述章疏類(自筆本・九種)一四六卷

重・円照上人行状記(凝然筆 正安四年写) 三卷

また宗性は、他筆本を改装し、外題・一見識語を記すなど手沢本に独自の装幀を施している。これらの中には指定外ではあるが、師・弁暁自筆本など貴重なものもある。

指定品の書誌情報については東大寺図書館編『東大寺図書館蔵 宗性・凝然写本目録』(昭和三十四年)を参照のこと。

#### 一〇四部

経巻以外の論疏を中心として、講式、縁起類、また文書に部類されるべき請定・結解状・記録類がある。このうちの二〇点が、国宝・東大寺文書として指定されている。

平安・鎌倉の論疏が多く、鎌倉初期を代表する華嚴の学僧尊玄の自筆聖教(「探玄記義決抄」等)ほかが含まれ、中世における華嚴・三論・法華・因明・俱舍等の教学の実態を知りうる貴重本が多い。

#### 一一一部

写本で粘葉装・折本装の古経巻・聖教類。平安・鎌倉期の経疏が多く、教学研究のみならず訓点資料・書誌学的資料としても貴重なものが含まれる。

#### 一一二部

版本で折本・袋綴・旋風葉装のもの。宋版(北宋東禪寺版、南宋開元寺版・思溪版・単刻)は華嚴・律関係が多い。また平安期の春日版(「法華撰釈」他)や鎌倉室町期の春日版・東大寺版(聖守版・戒壇院版等)・大安寺版・西大寺版・泉涌寺版(宋版復刻)など南都古版本の大

概の種類が含まれている。

宋・元版の書誌データは、前掲『奈良県所在 中国古版経調査報告書』に報告されている。

#### 一一三部

宗性・実弘撰述聖教の内、冊子装のもの。指定品は、前掲重・東大寺宗性筆聖教并抄録本（二一四種）三四七冊・九九卷（卷子は一〇三部）に含まれる。

その他、雑部として冊子装の古経巻・経疏（卷子本一〇四部に対応するか）や「普通唱導集」（室町）など唱導史料や縁起類を架蔵する。

#### その他

経疏部 また、以下の部号に、諸宗ごとに部類された疏釈や論義史料（等）（を）架蔵する。

一一四部 法相部・律部

一二一部 華嚴部

一二二部 俱舎部・起信論部

一二三部 三論部

一二四部 因明部

室町以降江戸期までの聖教が大半だが、平安・鎌倉時代に遡るものも含まれている。

#### 2) 重要文化財「東大寺聖教一八〇六点」について

これらの内、平成二十三年には、一〇一・一〇二・一一一・一一二部（既指定分を除く）を一括して、「東大寺聖教一八〇六点」として国重要

文化財に指定された。以下、特徴的な仏書を挙げ、東大寺聖教の性格を考えてみたい。

#### (1) 写本

写本は、年代別に見ると、平安時代・鎌倉時代書写のものが約八割を占めている(奈良時代三点、平安時代三一五点、鎌倉時代三四四点、南北朝時代四七点、室町時代七九点、安土桃山時代一二点、江戸時代七二点となっている)。その多くには朱・墨・角筆等による訓点が施されたものがあり、国語学上にも貴重なものが含まれる。

奈良時代写経としては、『大乘阿毘達磨雜集論』(二巻、一〇一部三号)があり、白点の訓点(第二群点)と白書・墨書による校合がなされている。見返「馬道」墨書から、三面僧坊馬道に作られた書架にあった馬道本と知られる。

平安時代前期に遡る写経に、吉蔵撰『法華義疏卷第十二』(一巻、一〇一部一五号)があり、前欠であるが、本文は草書を交えた速筆で書写され、多数の訓点が施されている。紙背には、延長六年(九二八)閏九月一日開催の論義と注記のある「三性唱私記」が写されている。『法華經本釈』(一巻、一〇一部一二B号)は、当初の本文冒頭を欠くが、旧表紙見返に凝然と目される筆にて補写がなされており、識語から凝然高弟禅明手沢本であることが知られる。

院政期・鎌倉時代になると、卷子に加え、粘葉装の冊子本も多く残されている。以下、諸宗に分類して特筆すべきものを挙げる。

華嚴関係では、杜順『華嚴五教止観』(一帖、一一一部四三号)があり、承安四年(一一七四)に高山寺明恵の華嚴の師とされる「京雅」が書写したもので、明恵教学の系譜を考える上で参考になる。また平安時

代書写の経論のなかに、『法華経伝記卷第九・十』(一帖、一一一部一五三号)など鎌倉時代の学僧宗性が表紙を新補し、外題や注の書込みなどを行っているものがあり、院家に相伝されてきた聖教の利用・管理を示すものとして興味深い。

宗性手沢本の中では、『華嚴経探玄記卷第十四』(一帖、一一一部一四号奥書)があり、仁治三年(一二四二)に高山寺義林房で「例衆廿人許」を「師範」として行った談義を聴聞した性鑿が本文に訓点を施したもので、文永五年に宗性が奉読している。

永仁三年尊勝院公暎(宗性の孫弟子、東大寺別当)書写の『五教章類集記』(一帖、一一一部四二号)は、高山寺十恵房順高の編纂にかかるもので、法蔵撰『華嚴五教章』を対象に高山寺義林房喜海が行った講説の聞書である。卷第廿二の本奥書によれば、明恵の孫弟子順高が建長八年(一二五六)から正元二年(一二六〇)の五年に亘り「丹州野口庄神尾山北谷之別所谷坊」で「類聚」したもので、同年七月には「神尾山遺教台」にて明恵高弟の順性房高信が「数輩学徒」に対して講義を行っている。文中には、「信云」(信恵房)「善云」(善教房)など(卷第十四)談義の発言者と発言内容を明示している。喜海の談義や、その談義の聞書をもとにした高信の講義の様子など、高山寺における華嚴教学振興の具体相と東大寺華嚴への継承を窺わせる貴重な史料である。

三論関係では、鎌倉時代中期書写になる『肇論疏』(三帖、一一一部六六号)があり、本奥書から、親本とした「東南院大経蔵本」は唐本を書写したもので、保安元年(一一二〇)に東南院覚樹が大宰府で交点したことが知られる。鎌倉時代中期の三論学僧聖然、聖守らが手沢・校合を行うなど、由緒ある写本を書写・利用したことがわかる。吉蔵撰『勝鬘宝窟』(六帖、一一一部七二号)は、弘長三年(一二六二)、三論の学

僧智舜が光明山にて書写・加点したもので、室町時代の東南院英憲・英訓らに相伝されたことが知られる。

その他、維摩会を初めとして、寺内・寺外の論義で必須の唯識、俱舎、因明関係の論疏が残されている。

法相関係は、安貞から嘉禄にかけて興福寺「上階経蔵大房」「上階馬道東第二房」等で「蔵司永恩」が書写した『唯識義私記』（一四帖、一一一部一三二号）などがある。永恩は、いわゆる永恩経（大般若経）に名を留める僧侶で、奥書から興福寺蔵司を務めていたことが知られる。

俱舎関係は、院政期以来室町時代に至るまで多数書写本があるが、『俱舎論頌疏第八開書』（二〇帖、一一一部一〇〇号）は文明十五年頃（一四八三）頃に越中・加賀国で書写されたもので、もとは嘉禄二年元然が泉涌寺にて書写した「東大寺楽円律師之抄物」であった（巻第九奥書）。

因明関係では、延暦寺源信撰『因明論疏四相違略註釈』（三帖、一一一部一五七号）がある。本書は天永四年（一一一三）東大寺定俊書写になり、識語から鎌倉時代前期の学僧重喜・室町時代後期の学僧英憲らに相伝されたことがわかる。巻上の奥書に、正暦三年（九九二）、源信が宋商楊仁紹に託して雲黄山行迪和尚を介して慈恩寺に贈り該書の批判を乞う旨の書信が収められている。また巻中見返に長徳三年（九九七）の慈恩寺基門徒宛源信書信も写されている。寛和二年（九八六）宋人周文徳に託して送付した『往生要集』とあわせ、日宋間の仏教交渉の様子を示す資料として貴重である。

天台との交流を示すものに、天台第九祖唐湛然撰『五百門論』（三帖、一一一部一四八号）がある。本書は、湛然による法華経注釈書で、体裁は粘葉装、表紙は梨地原表紙、金銀砂子野毛散題簽に宗性自筆にて外題を記している。宗性の書写奥書によれば、文永八年（一二七一）に宗

性が延暦寺宗澄法印の本を借り、弟子を顧筆して書写せしめ自ら校正し、翌年に誤字を訂正した。建長年間に延暦寺智円法印から借用し書写した『法華天台文句輔正記』(一一一部一四二号)とともに、宗性が天台の学説の収集に努め、清書本として後代に伝えようとした学問姿勢が注目される。また、巻上の本奥書で、承和五年(八三八)に円仁と共に入唐した円載(一~八七七)が、開成四年(八三九)に天台山「国清寺日本新堂」で写した本書を、会昌三年(八四三)従僧仁好に託して延暦寺三綱等宛てに送付した送状が写されている。伝記の少ない円載の行歴が知られる貴重な史料である。

真言関係では、新禅院伝来の書目が散見されるが、寛元三年般若寺で良恵書写になる『高野大師御広伝上』(一帖、一一一部一六七号)や永正七年(一五一〇)印融書写の本奥書がある『十住心広名目』(一一一部一六九号)などがある。

以上のように、写本には、論義、講問、読経、唱導など僧侶の修学の過程で利用されたものが多く、寺院の宗教活動を具体的に物語っている。

## (2) 版本

版本は、宋版(六〇点)と和版(八七四点)とを伝えている。年代別に見ると、鎌倉時代が最も多く泉涌寺版など律宗関係仏書で占められ、室町時代以降は『法華経』が多い(北宋時代一点、南宋時代五九点、平安時代八点、鎌倉時代四〇五点、南北朝時代五七点、室町時代一七三点、安土桃山時代四三点、江戸時代一八八点)。

まず宋版には、北宋東禅寺版(『仏母宝徳蔵般若波羅蜜経』二帖・一一一部一號)、南宋開元寺版(『大周刊定衆経目録』二帖・一一二部二



号ほか)・思溪版(『大乘大方等日藏經』一帖・一一一部四号)など大藏經の一部が伝わるほか、単刻の『夾科華嚴經』一六帖(一一二部五号)が伝わっている。本書は、紹興五年(一一三五)、福州城南法雲寺の暁宗が衆縁を募って造った中字本一六冊である。体裁は折本装、黒塗板原表紙で料紙は竹紙を用いている。本文は毎折九行一八字、上欄に小字で科文を記し、それを細線で本文の該当箇所と結んでいる。開版にあたり団欒庵居士林定立が都会首となり、菩提会衆、華嚴会衆らが施捨し、校勘は賢沙禪院、西禪寺の僧が当たっている。福州における華嚴宗の存在、菩提会・華嚴会などの信仰団体の活動がうかがえる史料である。また本經の刻工名は開元寺版大藏經の刻工の中にはほぼすべて確認され、本經が、大藏經開版事業の副産物として雕造されたことが知られる。

このほかに律宗章疏の南宋時代の単刻本が伝来している。道宣撰『四分律刪繁補闕行事鈔』(七帖・一一二部九C号)・『四分律刪繁補闕行事鈔科』(一帖・一一二部九D号)・『四分律行事鈔資持記』(七帖・一一二部九E号)は同一の版式・体裁で、いずれも「明州開元寺」等の施財刊記があり、同版と見られる高山寺本『行事鈔』には紹興三年(一一三三)の刊記があることから南宋初期の明州刊本であることが知られる。これらは、奥書などに「南京法華寺惠俊房/体然」の識語があり、「東大寺戒壇院」墨印があることから戒壇院伝来であることが知られる。

また宋版をわが国で覆刻した泉涌寺版が一七七帖伝来している。『行事鈔』(一一二部五八号など四部二二帖)・『同科文』(一一二部六一号など三部七帖)・『資持記』(一一二部六四号など六部三六帖)などでいずれも複数部数認められる。泉涌寺覚阿開版の『釈四分律含注戒本疏行宗記』(一一二部八三A号)には、前述の宋版と同じく「南京法華寺惠俊房」の識語が認められる。泉涌寺版の多くにも、「東大寺戒壇院」墨印が確

認される。泉涌寺版は、宋版の摺写法に従い、版木一面を摺った後に紙を継いでいるが、宋版の料紙が一面宛一紙の竹紙（一紙長約五六糎）であるのに対し、泉涌寺版は約四七糎と約八糎の楮紙の二紙継ぎを一面宛に摺っている。

これらの宋版系律宗章疏の多くには、朱墨の訓点や角筆などが認められ、鎌倉時代の南都において新渡の戒律書を積極的に習学した痕跡として貴重である。

和版にも、平安時代院政期から江戸時代に亘る多種の版本が架蔵されている。全国的にも現存例の少ない平安時代に遡るものが八点あり、紙背継目に「春日」墨印のある『不空羼索神呪心経』（一卷、卷子装、一〇二部二号）などのほか、安元二年（一一七六）沙門永尊刊記のある『法華撰釈』（四帖、折本装、一一二部一一A号）は「神護景雲三年（七六九）三月一日」本を用いて加点している（巻第三奥書）。

鎌倉時代には、鎌倉時代前期刊『成唯識論』（一〇二部八号、興福寺「東門院」表紙識語、東大寺「新禅院経蔵」墨印）など法相宗関係の多数の春日版がある。東大寺版では、弘安六年（一二八三）禅爾開版になる『華嚴一乗教分記』（三帖、一一二部二七号）などの華嚴系のほか、三論系では、聖守開版の『三論玄義』（一帖、一一二部二五号）や、永仁年間（一二九三～九八）に素慶が東大寺三論宗徒と太秦広隆寺僧らと呼応して開板した『法華義疏』（一二帖、一一二部二九号）などがある。

南北朝から室町時代にかけては、大仏殿千部経に寄進された『法華経』が多数見られるほか、応永六年（一三九九）刊の凝然撰『三国佛法伝通縁起』（三帖、一一二部四二号）などがある。また江戸時代の版経も『法華経』や五部大乘経など多数に及ぶが、大仏殿を再建した公慶が「永祿之災」で残った「印本一部」を「大殿再営之秋」に合わせて覆刊した『三

論偈頌』(一帖、一一二部一四八号)などが注目される。

このように版本には、戒壇院伝来の律学関係の宋版・泉涌寺版や興福寺・東大寺ほか南都諸寺で改版された版経が多数残されており、鎌倉時代以降の版経を利用した教学振興や諸寺間交流の拡大の様子が知られる。

華嚴、三論を中心に、広く八宗に亘る諸宗の仏書で構成される東大寺聖教は、古代から近世に及ぶ東大寺の学問を支えた中核となる経巻類であり、南都寺院の聖教を代表するものとして価値が高い。

東大寺聖教の詳細調査は、既指定分に引き続き、一〇四部、一一四部などに及んでおり、今後は論義書・次第書など、東大寺教学の具体相に触れる内容が順次明らかになっていくと期待される。

### 3. 高麗との関係を示す聖教

以上の聖教の中から、日本と高麗との文化交流史上、重要と思われるものをいくつか例示してみたい。

#### 1) 『花嚴経随疏演義抄』

まずは前述の義天版・澄観『大方広仏花嚴経随疏演義鈔』四十卷(一〇二部一号)である<sup>8)</sup>。本書は、高麗義天の開板になる義天版の原本であり、つとに重要文化財に指定されている。

本書の体裁は(「第四之下」)①装幀 卷子装。一紙三〇行、一行二〇字。天地単界。表紙は紺表紙にて、貼題簽「大花嚴経随疏演義鈔巻第

8) 大屋徳城『高麗統蔵雕造攷』(『大屋徳城著作選集』七、国書刊行会、一九八八年)、堀池春峰「高麗版輸入の様相と観世音寺」(『南都仏教史の研究』上、法蔵館、一九八〇年)、拙稿「高麗統蔵経と中世日本」(『日本中世の仏教と東アジア』、塙書房、二〇〇八年)。

四之下」(四周单廓)。朱頂軸。②法量 四二紙。一紙長縱三一・五cm、橫五五・九cm。界高二三・三cm。刊記「大安十年甲戌歲高麗国大興王寺奉宣 雕造」。③備考 四十卷完存。料紙は楮紙(白く、光沢のある紙)。表紙・第一繼目に「宗妙」(刻工名)、また各紙奥繼目に丁合「華嚴抄四下一」(第一紙)。

鎌倉時代の東大寺僧侶、宗性が記した奉読識語がある。

「貞元元年十一月七日戌時於笠置寺福成院房奉讀之畢 但自卷初至十住知識去年於本寺奉讀之畢 花嚴宗末學大法師宗性」(卷第二十上・紙背)

「嘉禎四年七月二十六日午時於東大寺中院奉讀之畢沙門宗性」(卷第九上)

「建長元年四月二十二日午時於東大寺尊勝院中堂 奉讀之畢 權大僧正宗性」(卷第十七下)

「文永六年己巳七月十九日申時於東大寺尊勝院中堂正面加一見了權僧正宗性」(卷第七上)

「文永六年己巳七月二十六日申時於東大寺尊勝院護摩堂南庇新學問所 合疏二下加一見了為生々世々值遇華嚴教法也 權僧正宗性 年齡六十八 夏臈五十六」(卷第六下)

「文永六年己巳七月晦日申時於東大寺尊勝院護摩堂南庇 新學問所合疏二下加一見畢 權僧正宗性」(卷第七上・紙背)

「文永七年四月六日 於東大寺尊勝院合疏一見之畢」(卷第七下・紙背)

「文永八年辛未十一月二十六日子時於東大寺知足院草菴合疏一見畢 權僧正宗性」(卷第七下)

「文永九年壬申二月十九日亥時於嵯峨釋迦堂西大門之北辺稱願房住房借寄 椀尾之本合經并疏加一見了依法皇御事同去九日寄此房之間 為自来三月二日被始行三十講所引見之也前權僧正宗性 嘉禎四年五月晦日

未時於東大寺中院奉誦之了沙門宗性」(卷第八上)

以上の内、最も古いものが貞永元年(一二三二)であるので、この時までには東大寺尊勝院にもたらされていたことが明らかである。

東大寺において、この義天版原本のテキストを書写したものが、計十三種伝わっている。義天版伝来後、転写が重ねられていったことが判明する。義天版は、「尊勝院高麗本」・「尊勝院印本」とも称され、伝写本の校合にも利用されている。

これに加えて、義天版を補刻した「東大寺版」と呼ばれる版本が、鎌倉時代の末期に作成されている。東大寺には、正慶元年(一三三二)理覚開板『華嚴経随疏演義鈔』(八帖、一一二部三二号)になる四部(計十二卷)などが伝存している。

前述のように鎌倉時代の東大寺華嚴を代表する学僧宗性は、二一四種(三四七冊・九九卷、重要文化財指定)にも及ぶ抄録本と著述を遺したことで著名で、多くの本に、『演義鈔』を引用している。その宗性が、八十卷『華嚴経』の修学に利用した澄観の随疏演義鈔は、いずれも義天版である。それは、宗性の抄録本に引用される『演義鈔』の分巻が、「二十卷上下」の義天版独自のスタイルに従っていることから明かである。

本書には、句切の箇所眼角筆、墨書による句切の合点や不審紙が付けられている。この義天版が実際に読まれた際に、経・疏と勘合する為に付けられたものであろう。ただし、そうした書き込みは、角筆や最小限の墨書にとどめられており、この義天版を汚さないように細心の注意を払って取り扱っていたことを示すものである。

宗性の弟子、実弘は、『離世間品疏演義鈔尋求鈔』(一帖 一一三部一六三号)で『華嚴経』離世間品についての論議を問答体で記し、華嚴経

疏・演義鈔・刊定記の典拠を引いているが、やはり演義鈔は高麗本の分巻である。同じく、『疏演義鈔略要文 第二・第四』(二帖、一一三部一六四号)の分巻は、義天版のものである。

このように東大寺の華嚴教学においては義天版が最も正確なテキストとして利用されている。現存の義天版は、流布本作成の際に刊行・書写・校合の中核になり、慎重に保管されて現在に伝えられてきたといえる<sup>9)</sup>。

9) 平成二十二年度には大東急記念文庫所蔵(現在は五島美術館所蔵)義天版『貞元新訳華嚴經疏卷第十』一巻が重要文化財に指定された。東大寺所蔵『演義鈔』との比較のため、以下に概要を記しておこう。

『貞元新訳華嚴經疏』は、義天録「大華嚴經」部に「貞元疏十卷 澄觀述」と著録されている。本巻の体裁は卷子装で、表紙を欠失するが、本文は首題「貞元新譯花嚴經疏第十從第三十八盡第四十經」から、尾題「貞元新譯花嚴經疏卷第十 三十六」まで首尾完存する。原軸は失われており、後補の後補魚々子地蓮華唐草文金銅軸が付されている。

一紙長は五三・六種で全三六紙を継ぐ。料紙は楮紙打紙で繊維は細く、美しい白紙を用いている。本紙は裏打ちが施され、天地が化粧裁ちされており、原装そのものではない。版式は、上下单边、無界にて、一紙三〇行、一行二〇字前後で、字体は、鋭利で清雅端正な楷書で精緻を極めており、字画整整、墨色鮮やかな精刻本である。版心は、各紙左端に「貞元花嚴踵十「幾」と小字にて記され、紙数の順を示す単位は欠いている。巻末に尾題から一行措いて、刊記「壽昌元年乙亥歲高麗國大興王寺奉 / 宣雕造」があり、壽昌元年(一〇九五)に開板されたことが知られる。

摺印の時期については、東大寺蔵『演義鈔』と較べると字体の一部がややたく、字間がやや詰まっているものの、摩滅や版木の収縮によるものとは思われず、字様・彫りの精緻さから初版に近い刷りと思われる。また本巻は、義天版の確実な初印本である東大寺蔵『演義鈔』と同じく卷子装であり、日本に残る宋版覆刻本や韓国に遺存する朝鮮時代重修本が、いずれも冊子装の体裁をとることからも、本巻は高麗時代の摺印になると考えられる。

また本紙の諸処に、句切のためと思われる爪印や不審紙が残されている。不審紙は、朱の染め紙や雲母引の紙が用いられている。東大寺蔵『演義鈔』にも、ほぼ同様の爪印と不審紙が認められる。東大寺蔵『演義鈔』の爪印と不審紙は、鎌倉時代の宗性を初めとする僧侶が習学のために付したものと思われ、本書のそれも同様のものと推測される。ちなみに前掲の『東南院経蔵目録』にも、義天版と目される本書の記載が見える。

## 2) 唐慧祥撰『弘賛法華伝』

その他注目すべきものに鎌倉時代前期書写になる『弘賛法華伝』（二帖、一一一部一五四号）がある。本書は、高麗・天慶五年（一一一五）刊本を保安元年（一一二〇）大宰府で書写した覚樹本の写本である。法華經受持の功德をまとめた本書は、『今昔物語集』の典拠として用いられたことで著名である。東大寺の写本には、以下の奥書が見られる。

（上巻・本奥書）

弘賛法華伝者、宋人莊永・蘇景、依予之勸、且自高麗国、所奉渡聖教百余卷内也、依一本書、為恐散失、勸俊源法師、先令書写一本矣、就中、蘇景等帰朝之間、於壱岐嶋、遇海賊乱起、此伝上五卷、入海中、少湿損、雖然海賊等、或為宋人被害、或及嶋引被擲取、敢无散失物云々、宋人等云、偏依聖教之威力也云々

保安元年七月五日於大宰府記之、大法師覚樹

此書本奥有此日記

（下巻・本奥書）

大日本国保安元年七月八日、於大宰府、勸俊源法師書写畢、宋人蘇景、自高麗国奉渡聖教之中、有此法華伝、仍為留多本所令書写也、羊僧覚樹記之

---

本巻の日本への伝来は徴証を欠くが、上記の爪印・不審紙が日本の鎌倉時代から室町時代にかけて付されたものと推測されることから、近世以前の古渡りであることは明らかである。伝来は、「無畏信寺」から、奈良・大閑堂（玉井久次郎）を経て、久原文庫（古栴堂文庫）に襲蔵されることとなり、大東急記念文庫に所蔵されている。

### 此書本奥在此日記

以上から、本書は覺樹が宋人に勸めて高麗国から渡した「聖教百余卷」の内にあり、宋人が帰朝の際に「壺岐嶋」で海賊に遭遇し、上巻が水没したものの、海賊は宋人らに撃退され、「散失」しなかった旨の日記が記されている。日麗間の文物の交流を示す貴重な史料である<sup>10)</sup>。

### おわりに

日本に伝来した聖教は、奈良時代以来、寺院の宗教活動に基づいて生成され、再生産され、また人々のなみなみならぬ努力によって、保管・保存されて現代に至っている。これらは世界的にも例をみない質と数量を誇っている。これらの聖教は、仏教学、仏教史、国語学、国文学、歴史学など多くの学問で利用される知識と経験の宝庫である。我々は、修理技術を駆使して、それを後世に伝えていく義務を負っている。日本における取り組みが、韓国での文化財保存の参考になれば幸いである。

### 参考

#### 日本における聖教・古文書の修理の現状

日本では、平安時代の経師や絵師などの職人がおり、寺院の經典聖教や絵画の仕立て、修理を行っていた。中世以降、公的機関や民間において、書跡・典籍や古文書の修理が行われてきた。現代においては、その伝統と技術を継承した技術者が、国宝・重要文化財の修理を行っている。以下、修理の内容の概略をお示ししたい。

10) 堀池前掲論文。



## I. 損傷の内容

修理を行う際に、まず作品がなぜ傷んだのかを考察する。その原因に応じた修理方法を選択する必要があるからである。傷む原因には、以下のようなものが考えられる。

- ① 環境に由来するもの 虫損、湿損、カビ
- ② 災害に由来するもの 汚損、水損、焼損
- ③ ヒトに由来するもの 手油の汚れ、開閉・捲りによる折れ・ちぎれ・剥離・剥落・綴糸切れ、相剥
- ④ モノの形状・性質に由来するもの バランスの悪さによる折れ、細い巻き軸による巻癖・折れ、糊浮き

最後に、修理そのものが、あらたな損傷を引き起こす場合もある。これらの原因により、外科的な手術が必要な場合、あるいは内科的な治療ですませる場合、これらを複合的に施す場合とに、対策がわかれてくる。

## II. 残すべき情報 文字と非文字

原因がはっきりしたら、修理を行うわけであるが、その前にいくつか注意すべき事柄がある。それは、修理によって消滅してしまうおそれのある情報について、事前にチェックし、消失を防ぐ事である。

まずは文字情報がある。墨書は当然であるが、鉛白や胡粉で書かれた白点、先の尖った木筆などで書かれた角筆などが書き込まれている場合がある。

また非文字情報、例えば料紙の風合い・体裁(刷毛目・板目・簀の目・四周の断ち線など)や爪点・針穴・折り痕・綴じ穴などがある。料紙の風合いや体裁は、その料紙が制作された時代・地域・背景・利用方法を推測させる手がかりとなる。爪点・針穴などは、その書物や経巻・文書

が二次的に利用された様子を示すし、折り痕や綴じ穴は保管方法の変遷を示す有力な手がかりとなる。

修理には、水を使い、料紙表面を平滑にする作業が伴う場合が多いが、これにより上記の情報が失われることが、過去の修理では行われてきた。現在の修理は、事前の入念な調査によって、これを未然に防ぐ努力をしている。

### III. 修理の内容

修理は、経巻や文書そののみを外科的に手を入れるだけではない。広い意味では、作品の収蔵環境を整えることや、修理後の管理形態も修理に含めて考える必要がある。

#### ① 調査

修理に先立っては、作品のコンディションや前述の諸情報の他に、蔵や保存施設などの保存環境(温湿度・黴・虫など)と作品を扱う人(学芸員、技術・取り扱いの知識有無)の調査をする必要がある。

#### ② 設計

作品の伝来の経緯や、今後の保管方法(収蔵環境、収納箱)、最適な取り扱い方法を関係者の間で十分に検討する必要がある。

#### ③ 補修

修理は、一度で行えば今後なにもしなくてもよいというものではない。糊や膠は時代と共に劣化していく。少なくとも五十年後の再修理を見越して補修をする必要がある。そのために常に可逆的な修理を心がける必要がある。修理の際には、下記の事柄に留意する。

汚れの除去(×漂白)、水の使用の注意、適切な補修紙・裏打紙の用

意 (×パルプ=残留物、酸性化)、繕い (糊の調整、糊代、文字の残し方、漉き嵌めの問題点)、補筆・補彩の可否、表装 (元使いか取替か 表具裂・表紙・見返・軸先)

#### ④ 管理

修理後に新たな損傷を引き起こさないために、太巻き芯 (桐、紙) などを付けたり、保存箱の形態を工夫する場合がある。

#### ⑤ 記録

次世代の修理を前提として、今回の修理で何を行ったのかを記録しておく必要がある。修理工程は勿論、一紙ごとのデータ、使用材料、写真を報告書と修理カルテにより永続的保管を図る。

我々には目の前に残された書跡・典籍、古文書の修理を進め、後世に伝える責務が課されている。聖教を利用する研究者も利用・公開を進めていく一方で、こうした保存についても目を向ける必要があろう。

Abstract

## Transmission and Preservation of Buddhist Sacred Texts in Japan - showing the example of Todai-ji Library

YOKOUHCHI Hiroto

*Agency for Cultural Affairs*

In Japanese temples, a multitude of Buddhist canons and sacred texts have been made and copied as the result of the monks' religious and academic activities. And even the small temples in the country, to say nothing of the big temples such as Todai-ji(東大寺), Kofuku-ji(興福寺), Enryaku-ji(延暦寺) and Koyasan(高野山) preserves a lot of texts now.

In the case of Todai-ji, the collections of Sonsho-in(尊勝院), Tonan-in(東南院) and Kaidan-in(戒壇院) among many branch temples have been gathered and arranged in the Todai-ji library. In spite of the two times war conflagration in the Kamakura jidai and Sengoku jidai (Warring Countries Period) the library have managed to accumulate and preserve the sacred texts of the branch temples, which covers the 8 schools achievements. Though the sacred texts of Sonsho-in - present Shogozo(聖語藏, Sacred

Words Storage Canons) - were offered to the royal family the Todai-ji library still have about 10 thousand sacred texts including some ancient texts and Soshō(宗性)'s and Gyōnen(凝然)'s works, most of which have been passed down in the branch temples. Many of the texts had been designated as national heritages before and also recently in 2009 1,806 pieces consisting of 872 pieces of hand copy texts and 934 pieces of wood block print texts were named to 'Todai-ji Sacred Texts' and designated as a new national important heritage.

The Nanbokucho jidai (South and North dynasties period) collection of Tonan-in which possesses 97 kinds of Buddhist texts in the form of 96 books and 225 foldings imported from Song China and Koryo dynasty shows even in the medieval times Todai-ji had continued to accommodate the new Buddhist thoughts in the continent. Some Uicheon editions(義天版) belongs to it. Also the collection of the Sonsho-in which possesses a few Tang China texts and May 1st Tripitaka hand copied in Nara period shows Todai-ji had tried to receive and preserve the new texts and thoughts of continent from the Nara period. The collection also includes some Uicheon editions.

The Todai-ji sacred texts which centers on Huayan and Sanlun but covers all the 8 school works are the essential texts which had supported the academic activities in the Todai-ji. It outstands other Nanto (Southern Capital) temples' libraries.

The investigation on the Todai-ji library is still underway and now the texts which shows the details of Todai-ji Buddhist studies such as Rongisho(論議書, debate texts) are on the investigation.

The Buddhist sacred texts in Japan have been created and copied following the religious activities in the temples. They have been stored and preserved up to now through the special efforts of many people. These sacred texts are the treasure house which holds valuable wisdom and experiences and can be used for many academic studies such as Buddhology, Buddhist history, Japanese, Japanese Literature and History. We have not only the privilege to use these heritages but also the duty to pass down them to the next generation by proper preservation and repairs. We hope the experience of Japan can be any help for the preservation of Korean sacred texts.

**Key Words** : Sacred texts, Todai-ji(東大寺), Sonsho-in(尊勝院), Shogozo (聖語藏), Hand copies of Nara Period, Song China, Koryo dynasty, Uicheon Edition(義天版)

2011년 5월 3일 투고  
2011년 6월 20일 심사완료  
2011년 6월 21일 게재확정